

20世紀メンズファッションとアーティストによる創作活動

20th Century Men's Fashion and the Creative Activity of Artists

北方 晴子

Haruko Kitakata

要旨

本論は20世紀初頭のヨーロッパで、一部のアーティストらにより当時のメンズファッションデザインに新たな試みがなされたことについて述べたものである。既に、メンズファッションにおいては19世紀半ばに現在のメンズスーツの原型が確立され、以後男性ファッションは単純化、画一化に向かい、ディテールの変化はあるものの、殆ど変化を示さなくなる。しかし、ファッションとアートが接近した1920年代～1930年代にかけて、アーティストたちがメンズファッションデザインの変化を試みていた。そこで、メンズスーツが確立された直後の19世紀後半のオスカー・ワイルドによるメンズファッション改革から、20世紀前半のイタリア未来派とロシア・アヴァンギャルドによる改革、そして戦後ドイツで活動したアーティストのヨーゼフ・ボイスによるメンズファッションの改革について触れた。なぜアーティストたちはメンズファッションに変革を及ぼそうとしたのであろうか。アーティストたちは自らデザインした服を着用し、芸術家としての作品と芸術家としてのイデオロギーを目に見える形として自らの身体を表現方法のひとつとした。彼らはアートという枠の中で既存概念や価値の変換を行いながら新たなものを創造した。それがメンズファッションへの改革となり、アーティストとして一見風変わりなイメージを表現した。

●キーワード：メンズファッション (men's fashion) / アーティスト (artiste) / 20世紀 (20th century)

はじめに

男性服においては、19世紀半ばにメンズスーツが確立し、以後男性服のユニフォームとなったスーツはディテールの変化はあるものの、大きな変化はしなくなった。

そのような単調になった男性服について、19世紀末、異議を唱えたのが、オスカー・ワイルド Oscar Wilde (1854-1900)¹⁾ である。彼は、「男性服にも美的要素を追究し、個性を見せるべきである。」と主張し、18世紀を想起させる非常に華美な服装（ベルベットの着、膝丈のキュロット、色鮮やかなネクタイとベスト、シルクの靴下）をした。しかしながら、その服装は自ら着用したものの、一般には広がらなかった（写真1）。

イギリスでは1870年代、「美的なものに最高の価値をおく」ことを謳ったエステティック運動（美学運動）が起こっていた。その代表者がワイルドであった。ファッションの分野では合理服協会 Rational Dress Society²⁾ が結成され、当時主流であった装飾過多の衣装とは対照的なアクセサリや装飾のない、ゆったりとしたドレスが、「エステティックドレス aesthetic dress」として、芸術を愛好する女性の間で注目され、すこしずつ普及し



写真1 オスカー・ワイルド 1882年

ていった経緯がある。その活動に関わりをもっていたワイルドは、男性服の分野でそれを先導した。しかし、女性服において装飾過多な衣装とは対照的なエスティックドレスに賛同しつつ、自らは華美な服装をしたことは、男性服が19世紀後半は一層単純化の方向へと向かう時代において、時代の求める男性像とは異なるものであったために、普及はしなかったと考えられる。近代社会において、男性のファッションは機能性や実用性を重視するようになった。そのような時代に、過去の時代に見られたような華美な服装は、時代錯誤的な試みであったと考えられる。

他方、シュツットガルト大学のギュスターヴ・イエガー Gustave Jaeger³⁾ は素肌の上に着る素材として、身体からの分泌物の発散を促すウールが最もふさわしいという仮説を立てた。そして、彼自身の肖像写真を見ても、当時の一般的な男性服ではないことが分かる(写真2)。アイルランド出身で文学者でもあり教育家としても多彩な活動をしたジョージ・バーナード・ショー George Bernard Shaw (1856-1959) は長き生涯を通して、イエガー博士の仮説の熱烈な信奉者であり、常にウールを身に着けていた。

このように、デザインや機能の面から、メンズファッ



写真2 ギュスターヴ・イエガー 1880年代

ションの改革の試みが19世紀に既に起こっていた。

その後も、いくつかの芸術化集団が20世紀の初頭にかけてメンズファッションに関しての創作活動がみられる。

I. メンズファッション改革の波

1. ウイーン工房とメンズファッション

1903年、工芸家集団「ウイーン工房」⁴⁾ が設立された。芸術家の育成、製品の構想、販売、工芸、建築などあらゆる分野において活動した。生活と芸術の「用」と「美」の一体化を図り、職人技術の復興を目標にしていた。特徴は、直線や長方形などの単純な幾何学構成であった。1910年代に「パリから離れて」独自のウイーン・ファッションを作り出そうとしていたウイーン工房は、1911年から正式なモード部門が誕生した。19世紀末から20世紀初頭にかけて、パリファッションが世界で注目を浴び、自信に満ち溢れていた。その影響下でいち早く抜けだそうとしていたのである。

彼らの服のデザインは、当時、1906年にパリでポール・ポワレ Paul Poiret (1879-1944)⁵⁾ がストレートなシルエットを発表し、センセーションを巻き起こしたのと同じような真っ直ぐなシルエットを持つが、直線や正方形、長方形が目立つグラフィカルなテキスタイルに特徴があった(写真3)。彼らが行った服のデザインは主に女性用ではあったが、写真は、作業をしている時のグスタフ・クリムト Gustav Klimt (1862-1918) で、肩に白い飾りのついた藍染のスモックを愛用していた。20世紀初頭の女性ファッションは身体を拘束した服を身に着けていたので、ウイーン工房は、こうした状況を変えようと変革を試みていた。デザインはコルセットを解放し、比較的ゆったりとしたウエストラインをもち、袖やスカートをつぶりさせ、動きの自由さを重視した。クリムト自身が着用していたスモックは、まさにそれを男性服に応用した形であったと考えられる。彼は、幾つかスモックを持っていたようであるが、写真で確認する限り、種類は多くはない。

ロベール・ドローネー Robert Delaunay (1885-1941)⁶⁾ は妻のソニア・ドローネー Sonia Delaunay (1885-1979) がデザインしたスカーフを巻いたルーマニア生まれの詩人トリスタン・ツァラを描いた(写真4)。色鮮やかで洒落たデザインのスカーフである。



写真3 グスタフ・クリムト 1910年頃



写真4 トリスタン・ツアラ ロベール・ドロネー画 1923年



写真5 アレクサンダー・ロドチェンコ 1922年

2. ロシア・アヴァンギャルドとメンズファッション

ロシア・アヴァンギャルドは、1910年代半ばソ連においてはじまった芸術運動で、絵画、彫刻、建築、写真等、多岐にわたる。特に、1920年代ファッションおよびテキスタイル・デザインを手掛けるようになる。リュボーフィ・ポポワ Liubov Popova (1889-1924)、ウラジミール・タトリン Vladimir Yevgrafovich Tatlin (1885-1953)、アレクサンドル・ロドチェンコ Aleksander Rodchenko (1891-1956)⁷⁾らがテキスタイル・デザインを試み、服をデザインした。ロシア構成派美術家たちは、「大衆のための芸術、日常品のデザイン」を背景に、そして、日常品のデザインとして、ファッションはその対象となったのである。ロドチェンコは、1922年ウールとレザーの男性用作業着をデザインした。大衆のために大量生産が必要となる。そこで、複製が可能なストレートなラインが採用された。そして、ゆったりめのストレートなラインは、誰もが着られるデザインでもあ

る。ロシア・アヴァンギャルドは、社会主義思想にもとに大衆化、複製化を前提にしていたこともあり、大衆向けの実用的な洋服の製造であった。鉛筆や小物を取める実用的な大きなポケットがついている(写真5)。

II. イタリア未来派の改革

1. バッラとダイナミックなデザインのスーツ

イタリアでは未来派⁸⁾が1910年から1916年にかけて音楽、彫刻、建築、映画、建築、インテリアデザイン、演劇や映画の舞台デザイン、絵画、彫刻、家具、写真、広告などの多彩な分野に渡り、未来派の活動としての一大特徴とされる各種宣言が続々と発表した。そして、メンズファッションを革新するための提案を主に宣言という方法で発表して、未来派メンズファッションとして提案した。

ジャコモ・バッラ Giacomo Balla (1871-1958)⁹⁾は、未来派の中でも、メンズファッションの改革に最初に取り組んだ。1912年頃から保守的な傾向にあった当時のメンズスーツ斬新なデザインを提案した(写真6)。時代に即した機能性や、一様に黒色のスーツに色彩を加えるといった現代性を表現し、都会生活の躍動感を賛美した。

メンズスーツをめぐっては、その後、宣言というスタイルで次々と発表されていく。最初の宣言は1914年5月 *Le vêtement masculin futuriste-manifeste* (未来派男性衣装宣言) である。

宣言の中ではそれまでの保守的なメンズファッションのデザインを否定し、未来派的な要素のあるデザインを



写真6 ジャコモ・バッラ 1920年代

提案し、新たな未来派衣装を提案している。現在から見ても、そのデザインは斬新である。

1914年の7月に始まった第1次世界大戦で、8月に入りドイツは戦線布告をした。ドイツの友邦であったイタリアは8月2日に中立宣言を発表し、戦争を見合わせた。未来派はこの政策に意義を唱え、激しい反対運動を展開し、中立の政策を変更しない政府に対し、彼らは「反中立服」と称する衣装を作り、デモを行った。前後して1914年9月11日に未来派は *Il vestito antineutrale manifesto futurista* (未来派反中立衣装宣言) を発表した。5月に発表された宣言のイタリア語版とされ、2つの宣言の基本的な概念はほぼ一致している。

また、1924年にデザインされたベストは、未来派の煽動の印として、共通の衣装の下に着用された。印象的な多色が特徴で、幾何学的なラインの中に色彩のダイナミックさが感じられる。

2. タイアートとつなぎ服「TUTA」

未来派のエルネスト・タイアート Ernesto Thayer (1893-1959)¹⁰⁾は1918年にトゥータ TUTA と呼ばれる上着とズボンが一体化した「つなぎ服」を考案している。それは女性性や男性性が強調された衣服ではなく、ジェンダーレスでモダンかつシンプルな服であった。タ



写真7 タイアートのTUTA 1919年

イアートの造語である TUTA には、作業着、工員用の衣服という意味があることから、機能主義的な要素が汲み取れる。

1926年にタイアートは同様のラインのつなぎ服と上着を考案する。1918年のつなぎ服をと類似しているが、ネクタイが添えられた(写真7)。

そして、1932年9月20日、タイアートは、Manifesto per la trasformazione dell'abbigliamento - maschile (男性衣装変革宣言)を発表した。

タイアートは宣言の前半の中で、袖なしの下着、障害にならないシャツ、軽い靴、びかびかの靴など最新の男性衣装一式を示した。そして、スポーティーなものを奨励し、身体のための衣服を提案している。そのために身体をあらゆる着膨れや動作を妨げるような圧迫から開放し、日常生活におけるどんな状況においても着用されるべきものを具体的に示した。

その後、彼はイタリアのムッソリーニ体制に急速に接近し、ファシスト国家組織による服飾界に役職を得てゆく。

このほか、未来派のフォルチュナート・デペーロ Fortunato Depero (1892-1960)は、1924年に男性用未来派ベストをデザインし、自らも着用していた(写真8)。

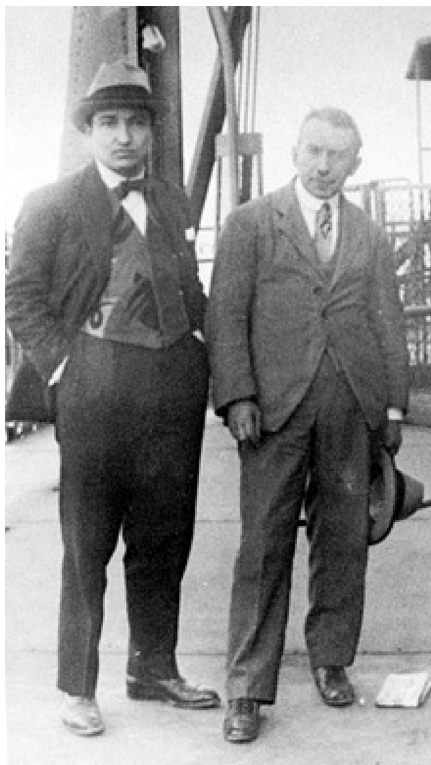


写真8 デペーロの柄物ベスト(左)とバッラの柄物ネクタイ 1924年

3. 1930年代の未来派とメンズファッション

画家トゥッリオ・クラリー Tullio Crali (1910-?)は、1929年に未来派に加わり、1932年以降「未来主義航空画家宣言」のグループ展に毎回参加し、航空絵画における代表作家の一人となった。そして衣装にも熱心に関心を寄せた。

1932年の彼の男性衣装の習作やデッサンで、非対称なラインを用いたデザインと鮮やかな色彩を特徴とするスーツを提案した。彼は自分用として数着試作し、実際に着用していた(写真9)。

画家ミーノ・デッレ・シーテ Mino Delle Site (生没年不詳)も、1930年代前半に男性用・女性用ともに衣装の革新に興味を示した。彼は1932年に「tuta termica maschile 熱のつなぎ服」を考案した。

画家ジェラルド・ドットーリ Gerardo Dottori (1884-1977)は、ファシズムの要素が強く見られる軍服風の衣装が提案された。

未来派は1930年代、衣服そのものだけでなく装飾品にまで関心を示し始めた。1933年3月に、Il manifesto futurista del cappello italiano (イタリア帽子未来派宣言)が発表された。それは、男性に美しい帽子の着用を勧めたものである。そして、1933年3月27日 Manifesto futurista sulla cravatta italiana (イタリア・ネクタイ



写真9 クラリーのスーツ 1933年

未来派宣言)が発表された。アンチネクタイと呼ばれ、軽くて光沢のある金属性のものを勧めた。

Ⅲ. メンズ・ドレス・リフォーム・パーティー

これまで述べてきたアーティストによるメンズファッションデザインへの改革への試みとは異なるが、20世紀初頭のイギリスでメンズファッションデザインの提案がされた例がある。

「メンズ・ドレス・リフォーム・パーティーMen's dress reform party (通称MDRP)」なる団体が設立された。1929年のことである。これまでに多くの資料を見つけるには至っていないが、試みとしては大変興味深い。メンズファッションの進歩向上を図ったもので(写真10)「暑い夏は、非合理的な長ズボンのスーツを辞め、もっと通気性がよくて衛生的、しかも見た目にも正しい正装を作ろう」というキャンペーンで、イギリス人の聖職者や医者、芸術家、学者などが集まって設立された。その後、世界中に支部が増えた。会員たちはタイの無い衿付きシャツや短めのパンツ、サンダルなどを好んだ。伝統的なスーツデザインを改革しようとしていた事実が読み取れる。しかし、第2次世界大戦に飲み込まれ、再びその勢いを取り戻すことはなく、1937年解散している。

メンズスーツ発祥の地でこのような試みがなされたということが興味深い。



写真10 メンズドレスリフォームパーティー 1937年

Ⅳ. 戦後のヨーゼフ・ボイスとフェルト・スーツ

戦後ドイツを代表する現代芸術家ヨーゼフ・ボイス Joseph Beuys (1921-1986)。1970年頃から日本ではその名を知られるようになっていた。毛利は「70年代初頭から80年代にかけて、アンディ・ウォーホル Andy Warhol (1928-1987) と並ぶアイコンであった」と述べている¹¹⁾。日本で行われた最初のボイス展は、1984年の西武美術館で催された『ヨーゼフ・ボイス展—芸術の原風景』であった。展覧会開催と同時に、ボイスは来日した¹²⁾。その年は、ロサンゼルスオリンピックが開催されたが、ソ連がボイコットしたことで知られる。世界はまだ東西冷戦下にあった。1993年にフジテレビギャラリーにて『ヨーゼフ・ボイス』展、その後1996年には、慶応義塾大学アート・センターにて、ボイス没後10年を記念しシンポジウムが開催され、その前後にも企画展が開催されるなどの機会がもたれている¹³⁾。そして、2009年に水戸芸術館現代美術センターにて『Beuys in Japan: ボイスがいた8日間』という展覧会が開催された。

ボイスが12歳の時にヒトラーがドイツの首相に就任し、ボイスはヒトラーユーゲント¹⁴⁾に入っている。1940年には志願し空軍兵になった。1944年にクリミア半島で撃墜され、現地の遊牧民族が救助し、寒い土地だったために動物の脂を彼の体に塗り、フェルトで体を覆いテントまで運んだことで一命を取り留めたエピソードがあり、それが後の彼の作品に影響を与えたと言われる。

第2次世界大戦後、ボイスはデュセルドルフ芸術アカデミーで彫刻を学び、終了後に作家として活動を始めた。

ボイスの特徴的なファッションと言えば、フェルトの帽子とフィッシャーマンズジャケット、白いシャツとジーンズであった。

フィッシャーマンズジャケットとジーパンというアウトドアのスタイルと、白いシャツにフェルト帽は都会的なファッションと相反する装いは、東と西、生と死、有機物と無機物といったものを統合することに彼は重きを置いていたという¹⁵⁾。彼が活動していたドイツこそ、資本主義と社会主義が分かれていた。彼は自分の芸術活動の中で、二項対立を融合しようとしていた。しかしながら、1989年のベルリンの壁、そして冷戦構造の崩壊を見ることなく、ボイスは1986年にこの世を去った。

彼の代表的な作品の中で、1970年に体を保護する鎧をイメージした「フェルト・スーツ」がある(写真



写真 11 ボイスのフェルト・スーツ 1970年

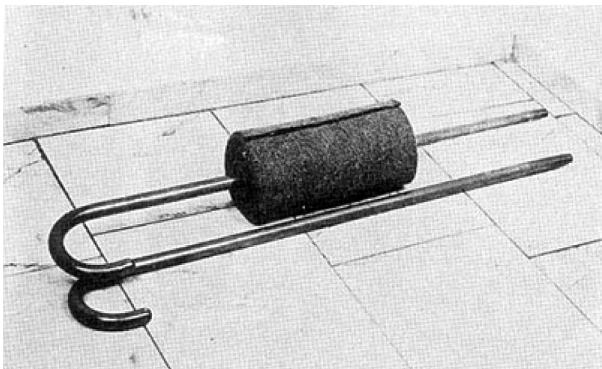


写真 12 ボイスのフェルトが巻かれたステッキ 1968年

11)。また、それに先立ち1968年に「暖かい散歩用ステッキ」という作品を制作している(写真12)。これはフェルトを7重にステッキに巻いたものである。このステッキは身体を支えるものではなく、大地からエネルギーをもらうためのものであったと考えられている。

前述したようにフェルトは彼が九死に一生を得たとき、身体を覆い熱を逃がさないことで一命を取り止めた。ボイスにとり、死んでいるか生きているかを隔てものが熱であり、エネルギーであった。したがって彼にとって芸術活動に熱を与えることが重要であり、熱気を与えて人の思考や感情を挑発して活性化させることが重

要であった¹⁶⁾。

けれども、ボイスが「アーティスト」であることが、彼の作品、風貌やファッション、そのたまたま含めたスタイルが重要であることをアーサー・C・ダントは指摘している¹⁷⁾。

ちなみに、ボイスの作品は、脂肪や鉄の塊といった輸送が難しい素材が多いということで、多くはヨーロッパの美術館が所蔵しているが、一部常設展で日本でも見ることが出来る¹⁸⁾。

おわりに

20世紀初頭世界は、新しい創造性を求めて、モードとアートがこの時代接近した時代であった。1907年にはP.ピカソ Pablo Picasso (1881-1973) とジョルジュ・ブラック Georges Braque (1882-1963)¹⁹⁾を中心とした「キュビズム cubisme²⁰⁾」、1909年には本論でも触れたマリネッティを中心とした「未来派」、1919年ドイツで「バウハウス bauhaus²¹⁾」、ロシア革命後に「ロシア・アヴァンギャルド」など、生活全般をアートとして捉え、ファッションにおいても美術的な実験として新しい美意識、新しい時代に相応しい作品の創造が取り組まれた。当時のアーティストらの活動は、パリ・オートクチュールのクチュリエたちに新鮮な刺激を与えたというのは、周知の事実である。その後も、1930年代にはエルザ・スカパレリ Elsa Schiaparelli (1890-1973)²²⁾ とサルヴァドル・ダリ Salvador Dalí (1904-1984) との間でより明確になり、超現実主義を信奉する芸術家たちが、芸術作品として洋服を次々と制作した。そのような時代において、アーティストたちがメンズファッションデザインの提案や改革の試みを19世紀末から開始した。20世紀初頭のウィーン工房で見られたメンズファッションデザインは、当時彼らが女性服で主張していたゆったりした実用性や機能性を男性服にも応用したと考える。そして、1910年代～30年代に見られたロシア・アヴァンギャルドやイタリア未来派のつなぎ服、そして色彩を加えた男性服の提案は、時代の流れが戦争へと向かっていくなかで、一種の男らしさを模索していたのではないだろうか。

そしてアーティストによるメンズファッションの戦後も続いていた。ボイスのフェルト・スーツは戦争を経験したことにより、身体のエネルギーがフェルトにより守られる。彼にとって生きていることの証としてのエネルギーが重要であった。

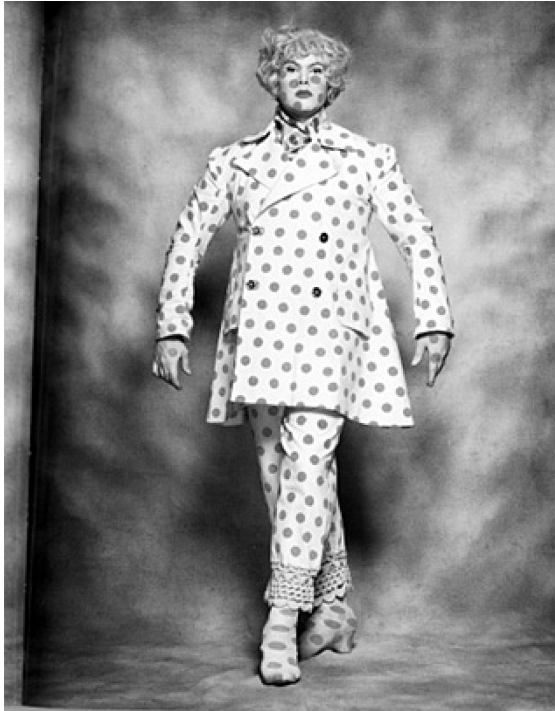


写真 13 バウリーのスーツ 1991 年

近年では、オーストラリア出身で、ロンドンで主な活動をしたパフォーマンス・アーティストのリー・バウリー Leigh Bowery (1964~1994)²³⁾ は、1980年代と1990年代のロンドンとニューヨークのアートとファッション界における影響力のある人物の1人と見なされている。彼はパフォーマンスアートとして、身体の形を著しく変える、斬新なファッションデザインを行った(写真13)。

今や、ファッションデザイナーの作品は世界中の主要な博物館で定期的に展示されるようになった。日本でもそうした動きが顕著である。そういう活動があったからこそ、ファッションと芸術は密接に結びつき、ファッションデザイナーは芸術家であるという概念が世間に受け入れられるようになったのである²⁴⁾と言えよう。芸術家としての自分の仕事を世に広めようとしているのであれ、政治的、芸術的イデオロギーを目に見える形で表現しようとしているのであれ、芸術家はその手段として意図的に洋服を利用した。「芸術とファッションは切っても切り離せない関係²⁵⁾」となっていることが改めて確認出来る。彼らは、「アート」という枠の中で既成概念や価値の転換を行いながら、新たなものの創造した。それが、メンズファッションデザインの改革への試みとなったのではないだろうか。

そして、なぜアーティストたちは一見してアर्टイ

ストと分かるような一風変わった装いをするのであろうか。ブラックマンが「芸術家とはかく奇抜なファッションに走りがちで、人と違う着こなしをする傾向にある。それは、自分の芸術を追及するために必要な自尊心、自分が身を置く前衛的な環境、慣習にたいする軽蔑心、ある種の遊び心から生まれてくるのであろう。」と述べるように、アーティストらは、意図的に「ファッションにおけるアーティスト」のイメージというものを世間に植え付けていったと考えられる。

すなわち、芸術家としての作品と芸術家としてのイデオロギーを表現するために、自らの身体をひとつの表現方法としてファッションを用いたのである。

今後は、ロシア・アヴァンギャルドのファッションとテキスタイルに関する事、ウイーン工房とメンズファッションに関する事、そして時代の変化の流れの中での位置づけがまだまだ不十分であるので、各事例をさらに分析し、検証したいと考える。

注

- 1) アイルランド出身の詩人。作家、劇作家。耽美的・退廃的・懐疑的だった19世紀末文学の旗手として多彩な文筆活動をした。ファッションに関しては、妻とともに合理服協会のメンバーであった。
- 2) 1881年に創設された。機能的なファッションを推進するために、自ら健康や着心地を基本にした衣服を着用し、それを広めようとして話題となった。1890年に解散した。
- 3) 1800年代、健康の為に肌に直接ウールを身につけることを提唱した。1984年にロンドンの雑貨卸売会社は彼の名の使用権と特許を取得し、ウール下着を発売した。後に、総合ブランドとして展開している。
- 4) 1903年設立。銀行家フリッツ・ヴェルンドルフアーをパトロンとして、ヨーゼフ・ホフマン (Josef Hoffmann 1870-1956) とコロマン・モーザー (Koloman Moser 1868-1918) により設立された工房。デザイナー集団。でウイーン分離派 (1987年、クリムトを中心に結成された新しい芸術活動を主張する集団) とその同胞たちは、芸術、建築、デザインなどすべての芸術活動を統合した。デザインには、洋服も含まれた。1932年解散。
- 5) 1903年メゾンを設立した。1906年にはコルセットのないストレートなシルエットのドレスを発表した。日本や、ロシア・バレエなどオリエンタルの影響を受け、作品を次々と発表した。多くの若手アーティストも育てた。
- 6) 20世紀前半に活動したフランスの画家。抽象絵画の先駆者の一人として知られる。妻のソニア・ドローネーも画家であった。彼女は幾何学で構成される抽象画を描く。テキスタイルデザインも手掛け、服に応用した。彼女は、面と線だけで構成された画面に色彩を配置するという新しい抽象表現を開拓し、それをテキスタイルや衣装デザインに試み、男性・女性の両方に向けて、アर्टイスティックなウェアを縫った。

- 7) ロシア・アヴァンギャルドの芸術家。絵画、デザイン、舞台芸術、写真など、幅広くに渡って活躍した。
- 8) 詩人フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ F.T. Marinetti (1876-1944) が、創始した芸術運動。1909年2月20日パリの新聞『ル・フィガロ』に「未来派宣言」を発表したことに端を発し、前衛的な芸術運動を開始した。文学、絵画、彫刻、建築、演劇、音楽、映画など生活芸術全般に広まった。街頭運動やパフォーマンスを通じ、この運動をイタリアの内外に広めた。当初はイタリアの芸術を改革することが目的であったが、次第に文化・芸術の域を超え、イタリアという国そのものを攻撃の対象としていくようになった。イタリアは古代ローマの遺跡や、ルネサンス美術などの遺産で生きているイタリアの伝統を否定していった。そしてイタリアの若者の参加を呼びかけ、文化や政治にみられる過去の遺産と伝統的な価値を一切否定していった。そして、機械や技術のもたらした都会の躍動感とスピード感を新しい美として表現し近代性を賛美する新しい美意識の誕生を掲げたのである。
- 9) 1871年トリノに生まれた。美術アカデミーで学んだ後、1895年ローマに移り制作活動に入った。その後、画家としての実績を積みながら頻りに展覧会にも出品していた。彼が生涯を通じファッションに対し強く関心を持ち続ける要因のひとつとなったのは、1900年の6ヶ月に及ぶパリ滞在中で、彼はアートよりもむしろパリのファッションに驚きを憶えた。当時のパリでは、男性は形式化したスーツスタイルに身を包んでいたのに対し、女性はアール・ヌーヴォースタイルと呼ばれた曲線を重視したシルエットに、華やかな帽子を添えたファッションをしていたときである。
- 10) 1929年に未来派グループに加わった画家・彫刻家である。彼は未来派グループに加わる以前からファッションへの関心が高く、1920年代、デザイナーのマドレーヌ・ヴィオネのアトリエでデザインに携わっていたことで知られているが、それよりも前に男性衣装にも関心を持っていた。
- 11) 水戸芸術館現代美術センター編、『ヨーゼフ・ボイスよみがえる革命』、フィルムアート社、2010、p. 124
- 12) ボイスの来日に関する内容は、ドキュメント『ヨーゼフ・ボイス』、西武美術館、1984に詳しい。
- 13) 水戸芸術館現代美術センター編、前掲書、p. 48
- 14) 1926年に設けられたドイツのナチス党内の青少年組織に端を発した学校外の放課後における地域の党青少年教化組織。1936年の法律によって国家の唯一の青少年団体（10歳から18歳の青少年全員の加入が義務づけられた）となった。
- 15) 林 央子他、『わたしを変えるアートとファッション』パルコ出版、2013、p. 53
- 16) 林 央子、前掲書、pp. 56-57
- 17) 水戸芸術館現代美術センター編、前掲書、p. 119
- 18) 水戸芸術館現代美術センター編、前掲書、p. 50
- 19) フランスの画家。ピカソと共にキュビズムの創始者の一人で、生涯に渡って絵を書き続けた画家。
- 20) 20世紀初頭にパブロ・ピカソとジョルジュ・ブラックによって創始され、多くの追随者を生んだ現代美術の大きな動向である。いろいろな角度から見た物の形を一つの画面に収めた。
- 21) 1919年、ドイツ・ヴァイマルに設立された工芸・写真・

デザインなどを含む美術と建築に関する総合的な教育を行った学校。また、その流れを汲む合理主義的・機能主義的な芸術を指す。ナチスにより1933年に閉校した。その活動は現代美術に大きな影響を与えた。

- 22) イタリアで生まれ、後にパリで1927年トロンブイユのセーターで成功した。ダリらシュルレアリスムのアーティストと交流を持ち、アートとファッションの融合を図った。センセーショナルな作品で知られる。
- 23) オーストラリア出身の、ロンドンを本拠地とする、パフォーマンス・アーティスト、クラブ・プロモーター、俳優、ポップ・スター、モデル、ファッションデザイナーでもある。
- 24) キャリー・ブラックマン、桜井真砂美訳『メンズウエア100年史』ブルースインターアクションズ、2010、p. 68
- 25) キャリー・ブラックマン、前掲書、p. 66

参考文献

- ・海野 弘監修『ロシア・アヴァンギャルドのデザイン』パイインターナショナル、2015
- ・今野裕一編集『ドキュメントーヨーゼフ・ボイス』、西武美術館、1984
- ・北方晴子「メンズファッションと男らしさについての一考察」『ファッションビジネス学会誌』、Vol.1、2006
- ・キャリー・ブラックマン、桜井真砂美訳『メンズウエア100年史』ブルースインターアクションズ、2010
- ・常見美紀子「ロシア・アヴァンギャルドにおけるファッションおよびテキスタイル・デザインの理念について」『デザイン理論31』osaka university knowledge archive、1992
- ・ハイナー・シュタッヘルハウス、山本和弘訳『評伝ヨーゼフ・ボイス』美術出版社、1994
- ・林 央子他『わたしを変えるアートとファッション』パルコ出版、2013
- ・水戸芸術館現代美術センター編『ヨーゼフ・ボイスよみがえる革命』フィルムアート社、2010
- ・山本和弘「ヨーゼフ・ボイス研究」『ヨーゼフ・ボイス—ハイパーテキストとしての芸術』慶応義塾大学アート・センター、1999
- ・Colin McDowell, *The man of Fashion*, Thames and Hudson, 1997
- ・Farid Chenoue, *History of men's fashion*, Flammarion, paris, 1993

図版出典

- ・キャリー・ブラックマン、桜井真砂美訳『メンズウエア100年史』、ブルースインターアクションズ、2010
- ・ハイナー・シュタッヘルハウス、山本和弘訳『評伝ヨーゼフ・ボイス』、美術出版社、1994
- ・慶応義塾大学アート・センター編『ヨーゼフ・ボイス—ハイパーテキストとしての芸術』、1999
- ・art/fashion, Biennale di Firenze, Skira editore, 1997
- ・Hayward Gallery, *Addressing the Century*, 1999
- ・Rade Sten, *Against fashion*, Mit press, 2004
- ・Fergus Greer, *Leigh Bowery Looks*, Thames&Hudson, 2002